

Tam gunes tutulması

辻村 幸子

1 なぜトルコにしたか

この日食はずいぶん前から話題になっていた日食である。20世紀最後の皆既日食、ヨーロッパを縦断し有名都市を通る、ノストラダムスの予言が的中すれば人類はこの日食は見られないことになるなど何かと話題になる要素の多い日食であった。さて、ここまで皆既帯がバラエティーに富んでいるとかえってどこで見るか迷ってしまう。しかし、日食は晴れなければ意味がない。1998年は自分にとって日食不作の年（アンティグア・バヌアツとも曇りだった）であったのでこの皆既こそ快晴のもとで見たい。それと、ヨーロッパとアジアの接点であるトルコには前々から行ってみたかった。そこで、トルコ・シバスに行くことにした。

2 観測の準備

そうはいつでも毎度おなじみのことで特別の用意はしなかった。いつもの通りにいつもの機材を使っただけである。

- ① 連続撮影 全経過を一枚に納める。タイムスケジュールは食甚を中心に5分刻みに前後にとりていき、第1接触を越えたところをスタート、第4接触を越えたところで終了とした。5分刻みというのは結構忙しいのだが見た目が1番きれいになると思う。

使用機材 マミヤ RB67 マミヤセコール65mm F4.5

- ② 拡大撮影 これはメンバーの中でもやる人が多いのであくまでも証拠写真と考えた。双眼鏡は一応持って行くが、これは現地ガイド・TEDASのスタッフのみなさんに貸すつもりだったのでこれで拡大像を見るのが目的だった。タイムスケジュールはフィルムの枚数に限度（せいぜい38枚）があるので第2接触13枚、コロナは露出を1/1000秒から1/60秒までをそれぞれ2枚、第3接触13枚とした。

使用機材 マクストフカセグレン f 500mm F 8 （笠井トレーディング製）
ペンタックスLX

- ③ 本影錐の撮影 広角により月の影が動いていく様子を撮影する。オート撮影では自動で露出が補正され食が逆行してしまう場合があるので露出一定とすることにした。

使用機材 ペンタックスLX ペンタックスタクマー20mm F2.8

- ④ 自分の目でしっかり見る これをしなければアマチュアの場合本末転倒である。ただ金星がいつ頃から見えたと正確な記録を取るために録音をすることにした。

3 2分間人生は止まった

トルコに入ってから雲さえほとんど見ることのない好天が続いた。事前に天気の情報を手に入れたいとガイドのハヤティさんに頼んでおいたのだが、この好天続きでこっちのその気が全く失

せてしまった。前日のリハーサルもいい天気夕方ちょっと雲が出てきただけで夜はまだ快晴である。前日の晩に暗くなったとき街灯がどこに点灯するのかのチェックに観測場所のTEDAS構内のバスケットコートに行ってみる。結構あちこちついているので可能なところはすべて明日の日食が終わるまで消してもらった。ありがとうございます。敷地に沿ったところはどうしても消せないということなのだが、かなり離れているのとポプラの木で隠されるところも多くそれほど観測に支障になるような感じはなかった。5等星くらいは見えていそうな星空で流星がぼつぼつ見られる。スルタンホテルに泊まっているメンバーもやってきていつの間にか流星を見る会のようにってしまった。中には写真を撮っているメンバーもいる。明日の本番があるので流星&星見の会はそこそこにしてそれぞれの宿舎に戻る。

日食当日は朝からまさに雲一つない快晴である。心配していたシバス町中も特に混乱はなくスルタンホテルのメンバーも予定通りここに到着した。おおかたの準備が終わって早めの昼食をとって第1接触を迎えるはずが500mmの方になかなか太陽が入らない。第1接触の時間は迫ってくるしだんだん焦ってくるのでなおさらはいらぬ。まわりにいた室伏さん・松岡さん・平井さんなどの協力によってやっと太陽を捕まえることが出来たのが連続撮影開始の5分前であった。冷や汗ものである。今度は全周微動の雲台にしよう。

天気がいいので連続撮影の方は予定通り進む。これほど天気に不安のない日食のなかなかないものである。食は順調に進んでいき、まわりの風景も影があるのに暗いというか、NDフィルターを通して見ているといった感じになってきている。ただ、暗くなり方が1999年2月にあった金環日食の方が暗くなっていったように感じたが、食分が大きくなるにつれさすがに今日の方が暗くなっていったように思う。ただ照度計で測ったわけではないので確かなことは言えないが。気温も下がってきているようで帽子もいらなくなってきた。14時12分頃上空高いところを鳥が飛んでいく。かなり高いところを飛んでいるようで、双眼鏡で見ても種類がわからなかった。日食に関係があるのかどうかはわからない。14時18分頃さすがにそろそろといった雰囲気になってきたのか、あれほどにぎやかにおしゃべりしていたメンバーが静かになってきた。みんなそれぞれ自分の準備に余念がない。14時23分頃皆既日食初体験の吉村貴之さんが緊張してきたせいかトイレに行きたいとお願いした。今からトイレに行っていたのでは日食を見損なうかもしれないということで結局我慢することにした。大丈夫かな。14時24分11秒（第2接触約7分前）木寺さんが金星を見つけた。その後次々にメンバーの金星見つけたの音があがるが、私はなかなか見つけられなかった。皆既になれば必ず目にはいるはずなので探すのは早々にあきらめた。14時28分26秒（第2接触約2分30秒前）シャドーバンドが見えるとの音があちこちからあがる。ここのバスケットコートはコンクリートで固めてあるので、シャドーバンドがよく見えるのではと予想していたのだがまさに的中。細かいさざ波が北東方向からさわさわというような感じで流れてくる。それがいったん薄くなって消えそうになったのが14時30分30秒（第2接触約30秒前）にまた濃くなってきた。14時30分12秒（第2接触約2分前）平井真希子さんの「NDはずしていい」という質問に答えるためそっとNDを太陽の見える反対の方からはずしていくと、なんと！見事に内部

コロナが見えている。そのままNDははずしてしまった。思わず「外部コロナ」が見えていると叫んでいたのはよほど気が動転していたのだろう。平井さんの質問にはまともに答えていなかった。第2接触はダイヤモンドリングというより鎌のような太陽がそのまま細くなってベイリーピースになっていった。皆既になってまず驚いたことは内部コロナがまぶしくてプロミネンスがはっきりしないことである。撮影を進めながらコロナの形はどんなかと落ち着いて観察してみるとどうも目立った形がない。よく見ると月の縁全周にまぶしいコロナが輝いている。思わず「ダリア型のコロナだ」と叫んでいた。撮影が一段落してカメラのファインダーから目をはずしストリーマの数でも数えようと肉眼でコロナを見ると、暗い空には大輪のダリアの花が浮かんでいた。ストリーマの数があまりにも多すぎて数を数えるのはあきらめてしまった。地平線付近は思ったより赤くなっていない。気持ちオレンジ色になっている程度だ。今回はどういう訳か時間に余裕があるように感じられる。近藤さんの「食最大」という声にも驚かない。1度は本物を見たいと思いつつなかなかお目にかかれなかったダリア型のコロナ、1990年シベリア・チェルスキーの敵討ちだ。月の縁のプロミネンスはとにかくたくさん見える。いくつ見えるというよりも月の縁の片側を赤くべったり染めている。ピンク色に光り輝いているもの、コロナの中に浮いているものと形も様々だ。そのうち、このピンク色のプロミネンスのあたりから光の粒がポロポロポロとこぼれてきた。第3接触もベイリーピースだ。つぶつぶが次第につながって行って日食は終わった。後はみんなが終わったと騒いでいるときも冷静に5分ごとにシャッターを切る辛い作業が待っている。

4 結果

連続は好天のおかげでまさに教科書通りのものだった。拡大はコロナの分が1/1000秒と1/60秒の差がほとんどなかったので、露出を1/1000秒、1/250秒、1/60秒、1/15秒、1/4秒のように一段階とばしにした方がよかったかもしれない。フィルムの枚数に制限がある以上こうした方がよかったと思う。広角は露出アンダーで話にならなかった。というように写真についてはいろいろあったが、好天に恵まれとにかく極大型のコロナが見られたのが1番よかった。やっぱりコロナは極大期のものが1番美しいと思った。

Tam güneş tutulması・・・トルコ語で皆既日食の意味